

近畿自動車道舞鶴線建設に伴う

鴨庄古窯跡群(1)

— 南1号窯跡 —

1988年3月

兵庫県教育委員会

近畿自動車道舞鶴線建設に伴う

鴨庄古窯跡群 (1)

— 南1号窯跡 —

1988年3月

兵庫県教育委員会

本文目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 遺構と遺物	
第1節 遺構	5
窯跡の立地	
窯体の構造	
灰原	
第2節 遺物	6
窯体土器	
灰原土器	
第4章 まとめ	23

插图目次

- 第1图 周边遺跡分布图
- 第2图 窯跡地形图 (調査後)
- 第3图 窯体実測图
- 第4图 窯体遺物(1)
- 第5图 窯体遺物(2)
- 第6图 灰原遺物 (表土)
- 第7图 灰原遺物 (暗黄褐色)
- 第8图 灰原遺物 (黑色灰層 1)
- 第9图 灰原遺物 (黑色灰層 2)
- 第10图 灰原遺物 (黑色灰層 3)
- 第11图 灰原遺物 (壺・甕)
- 第12图 壺口縁実測图

図版目次

- 図版 1 遺跡周辺航空写真
- 図版 2 上、窯跡遠景（調査前）
下、窯跡遠景（調査後）
- 図版 3 上左、窯体たち割り状況
上右、窯体たち割り横断
下、窯体たち割り横断
- 図版 4 上、前庭部付近土層断面
下、焚口付近土層断面
- 図版 5 上、灰原上段土層断面
下、灰原下段土層断面
- 図版 6 出土土器(1)
- 図版 7 出土土器(2)
- 図版 8 出土土器(3)
- 図版 9 上、出土土器(4)
下、甕口縁
- 図版10 上、坏A蓋
下、坏A身
- 図版11 上、平瓶口縁
下、線
- 図版12 上、台付椀脚台
下、高坏脚部
- 図版13 上、把手
下、鉢口縁
- 図版14 上、甕口縁文様(1)
下、甕口縁文様(2)
- 図版15 上、甕口縁文様(3)
下、甕内面調整

例 言

1. 本書は、兵庫県水上郡市島町南字奥谷に所在する、南1号窯跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、日本道路公団の委託を受けて兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、日本道路公団による近畿自動車道舞鶴線建設に伴うものであり、兵庫県教育委員会が調査主体となり、輔老拓治・吉田 昇が担当した。
4. 本書に使用した実測図及び製図は、和田早芳子・高島知恵子・前田陽子・松本 睦・石本淳子・井川佳子・下条豊美が行った。
5. 本書で使用した写真の撮影は、遺構を調査員が分担して行い、遺物の撮影については森 昭氏の手を煩わした。
6. 遺物番号の表示は図版・図面・本文を通して統一し、図版のみのものについては、500番代で示した。
7. 本書で示す標高値は、日本道路公団設定のB.Mを使用し、方位は磁北である。
8. 執筆は、第1章を輔老が、他を吉田が担当し、吉田が編集にあたった。
9. 執筆にあたっては、下記の方々の御教示を得た。記して感謝の意を表したい。
五十川伸矢・西山茂己・菱田哲郎・村上泰樹・村上賢治・加古千恵子・岸本 一宏

第 1 章 調査に至る経過

近畿自動車道舞鶴線は、日本道路公団より計画施工された、高速自動車道で、京都府舞鶴市から兵庫県美郷郡吉川町に至り、中国高速道に接続する。

この自動車道は県内の水上郡市島町・春日町、多紀郡西紀町・丹南町、三田市を経て吉川町に至る。

昭和43年度国庫補助事業による兵庫県埋蔵文化財遺跡分布調査地図を作成するにあたり、豊岡市、出石郡、朝来郡、水上郡、多紀郡、三田市等の各市町を対象地区として、分布調査を実施した。南古窯跡1号窯はこれから周知の遺跡として掲載された遺跡である。

昭和53年度近畿自動車道舞鶴線の建設計画が具体化するにあたって、日本道路公団は兵庫県教育委員会に対して、文化財保護法に基づく遺跡の所在及び確認を依頼した。

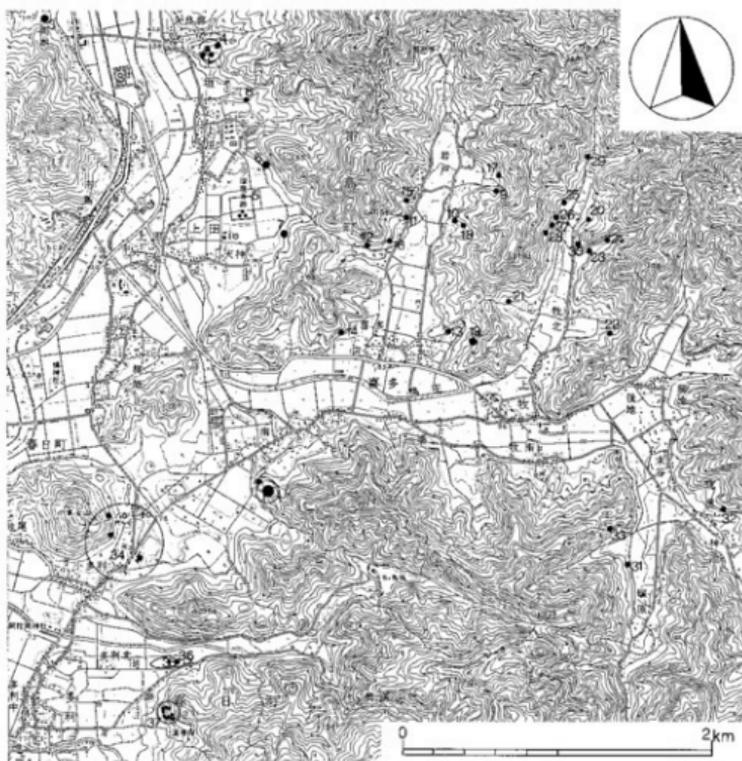
このことにより、県教育委員会では遺跡詳細分布調査を実施、この結果を基礎にして設計協議を行った。

その後、昭和56年度に入り、第2回目の遺跡分布調査を実施した。

この結果、当該路線地内では市島町上牧古窯跡・南古窯跡、春日町七日市遺跡などを含めた遺跡または包蔵地53カ所が確認された。

昭和56年度に入り西紀町散布地の確認調査を始めとし、順次全面調査または遺跡確認調査に入った。

ここ、南古窯跡1号窯は昭和57年8月から12月にかけての調査である。



1. 南1号窯跡	2. 南2号窯跡	3. 北岡本古墳	4. 久良部古墳群
5. 三ツ塚遺跡	6. 三味古墳	7. 天神瓦窯跡	8. 上垣1号窯跡
9. 岩戸1号窯跡	10. 岩戸2号窯跡	11. 岩戸3号窯跡	12. 岩戸4号窯跡
13. 岩戸5号窯跡	14. 岩戸6号窯跡	15. 岩戸7号窯跡	16. 岩戸8号窯跡
17. 岩戸9号窯跡	18. 岩戸10号窯跡	19. 喜多中世墳墓群	20. 上牧1号窯跡
21. 上牧2号窯跡	22. 上牧3号窯跡	23. 上牧4号窯跡	24. 上牧5号窯跡
25. 上牧6号窯跡	26. 上牧7号窯跡	27. 上牧8号窯跡	28. 上牧9号窯跡
29. 上牧10号窯跡	30. 上牧11号窯跡	31. 北奥1号窯跡	32. 北奥2号窯跡
33. 北奥3号窯跡	34. 柏野古墳群	35. カナツキ遺跡	36. カナツキ古墳
37. 松ノ本古墳群			

第1図 周辺遺跡分布図

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

水上郡市島町は、兵庫県中央部の東端に位置する。旧丹波国に所属し、北を京都府福知山市と、南を水上郡春日町、西を水上郡青垣町に接している。

町の中央部を流れる竹田川は、福知山市で合流して土師川となり、更に北へ下って由良川となって日本海へと注ぐ。南は国道175号線で旧播磨国に続いており、河川的にも、水上町石生に見られる分水嶺を境に、佐治川・加古川となって南流し、瀬戸内海へと注ぐ。

まさに、兵庫県と京都府を南北に縦断し、瀬戸内海から日本海へ通じる重要なルートであり、戦前の舞鶴港・福知山へと連なる要衝の地域への通路でもあった。

町域は、標高565mの妙高山や高谷山を中心とする土地によって、大部分が占められており、偏狭な平野部は、竹田川及び竹田川に注ぐ支流の流域に見られる。竹田川流域には、河岸段丘が発達しており、複数の段丘構成が見られる。

竹田川の支流、鴨庄川の流域には、谷地形の明瞭な地域が存在し、窯業地帯に於ける窯構築の場を提供している。

第2節 歴史的環境

今回調査の実施された窯跡周辺の埋蔵文化財については、国史跡の「三ツ塚遺跡」を除いて、何ら知られていなかったと言っても過言ではない。

周知の遺跡としては、春日町の前方後円墳「二間塚」他僅かな古墳であり、春日町榎原出土の磨製石剣のように、多くは偶発的に発見された遺物が知られている。

そんな中で、昭和56年偶然の発見による、野々間の山裾出土銅鐸は、特記すべきものであり、事後の確認及び追加調査によって、更に1口の銅鐸が出土し、一躍この地域が注目されるようになった。

その後、圃場整備事業、あるいは近畿自動車道舞鶴線の建設に伴い、原始・古代の丹波を知る上で貴重な資料を提供している。

近畿自動車道舞鶴線建設に伴う発掘調査では、春日町国領遺跡で弥生時代後期と中世前半の集落址が、松ノ本及び多利では古墳群が調査され、5世紀から7世紀にかけての古墳群の内容が判明している。

平野部では、野村石剣出土地の北にあたる山垣遺跡から、奈良時代前半の里長に関係する木簡や木製品を伴って、多くの遺構・遺物が出土している。インターチェンジ建設予定地の七日市遺跡からは、弥生時代中期から古墳時代初期の、周溝墓及び住居地を伴った集

落が大規模に見つかっており、更には、平安時代前半頃の水上郡衙と思われる掘立柱建物群も見つかっている。特に注目を集めたのは、最下層から見つかった先土器時代の遺物であり、始良火山灰を伴った石器群の出土で、一度にこの地域の歴史の始まりを、古くまで遡らせてしまった。

多利遺跡は平安時代後半から鎌倉時代前半の遺跡であり、和鏡・輸入磁器を副葬した土拵墓や掘立柱建物址群などが見つかっている。

市島町域の遺跡では、昭和47年度以降数次にわたる調査の実施された「三ツ塚遺跡」があり、金堂を中心として両側に東西二塔が一直線上に並ぶ、「新治廃寺式」の伽藍配置を有する寺院址を中心に、掘立柱建物群、弥生時代の遺構・遺物が複合的に発見されている。背後の山裾に所在する天神瓦窯跡は、三ツ塚の寺院址に供給されていた瓦の窯跡である。

久良部古墳群は比高30m余りの尾根筋に立地する古墳である。調査の実施された1号墳は10m未満の円墳であり、内部主体に堅穴式の石室を持つ。石室内からは、径9.2cmの振文鏡が1面出土している。墳丘外部には外護列石が巡っている。尾根上には他に2基の同様の古墳が存在し、更に100m隔てた所には「孤塚」と呼ばれる古墳も見られる。

群集墳では、戸坂字長者ヶ野所在の長者ヶ野古墳群が見られ、数基からなる円墳で構成されている。横穴式石室を内部主体とする古墳では、北岡本古墳や上垣の三昧古墳が知られているが、古墳の絶対数としては非常に少なく、今後発見増加の可能性が高い。

窯跡については、古くから知られていたようで、市島町史実研究会による踏査なども行われており、更に、三ツ塚遺跡発掘調査団の方々による、詳細な調査・報告によって、ほぼ全容が知られている。

現在、30基程の須恵器窯跡が知られ、鴨庄古窯跡群と称している。

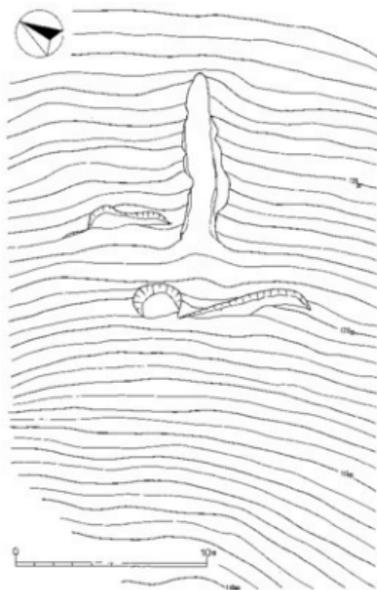
三ツ塚遺跡の北に1カ所、岩戸の谷に11カ所、上牧の谷に11カ所、末谷の奥に3カ所、南村の南に2カ所である。最も古い窯跡は、現在の所、南と岩戸の谷入口の2カ所であり7世紀前半と考えられる。その後は少し間を置いて、岩戸の谷から上牧の谷へと継続して操業され、末谷の北奥にて終了する流れが見られるが、最近、南1号窯跡のすぐ西で、継続すると思われる時期の窯跡が見つかり、今後新発見の可能性も高いが、大きな流れとしては変化しないであろう。

喜多の背後の山筋には、中世墳墓の群集が見られ、近畿自動車道舞鶴線建設に伴って調査が実施された。

第3章 遺構と遺物

第1節 遺構

窯跡の立地



第2図 窯跡地形図（調査後）

南1号窯跡は水上郡市島町南字奥谷に所在し、竹田川の支流である鴨庄川の南、日ヶ奥池から派生する支谷の先端、山の尾根より少し下った所に位置する。春日町との町境からは440 m程の所にある。

窯体は南に開口する谷の斜面に築かれており、標高122 m付近から130 m付近に立地する。山裾には、元最明寺建立地との伝承があり、明治年間に現在地へ移ったらしく、基石状の石造物も見られる。

尾根上は比較的なだらかではあるが、傾斜角40°の斜面は非常に急であり、山の頂部に近い急傾斜地の立地も、当窯跡の特徴の一つと言えよう。

窯体の構造

窯は全長9 mのほとんど地下式の窖窯である。窯体の幅は焚口で1.1 m、焼成部で1.5 m、先端部で1 mを測る。焚口は「ハ」

の字状に開き、ほとんど寸胴のような状況を尾している。窯体主軸の方位はN59°Eである。

また、床面の傾斜角度は、窯体下半部付近で40°、窯体上半部では60°の急傾斜となる。側壁の高さは、深い所で1.43 m、浅い所で0.65 mを測る。窯体は地山掘込みで構築されており、一部側壁面は岩盤のままで赤く酸化している。側壁は全て内方へ傾斜する状態であり、天井部のみが崩壊していると思われる。岩盤以外の壁面には、ササ湿り粘土を貼り付けており、指の痕跡が見られる部分もある。床面は岩盤部分をそのままにし、他の部分のみ粘土で床を貼っている。

たち割り調査の結果では、床面は焼成部付近から上方で2枚検出されている。壁面についても、床面と同様の部分で2枚見られ、補修の痕を伺うことができる。

前庭部は最大幅1.5m、奥行1.5mのやや平坦な面となっている。焚口から前方に4～5m下った所には、地山整形による2.5m×1.8mの円形土壇と、長さ6m、幅1mの長方形で平坦面を持つ遺構が検出されている。共に急斜面に立地する窯での、作業に伴うスペースと考えられる。

灰原

灰原は焚口の前方から、標高差で20m下方の山裾まで拡がっている。傾斜面上の灰原は広範囲であるが、灰層はまばらとなる。山裾の谷部灰原は、安定しており、深い所で0.5mの灰層が見られ、土器もこの地区での検出が多い。

しかし、灰原の中心は計画路線外となっており、調査は路線内でのみ実施した。

第2節 遺物

当窯跡出土の遺物は土器と鉄器であり、土器は生焼けを含めて須恵器である。出土地点は、窯体内及び灰原であるが、主体は山裾の灰原である。全般的に小破片が多く、溶着及び歪んだ物が多い。実測にあたっては、図化の可能なものについては全て図化する方針で実施したが、鴨庄古窯跡群上牧地区の窯跡に比べ、かなり不良品までも製品として窯出しされたと考えられ、放棄された土器は使用の範囲を大きく越えている。以下、器種・器形別に土器の概要を述べる。

窯体土器

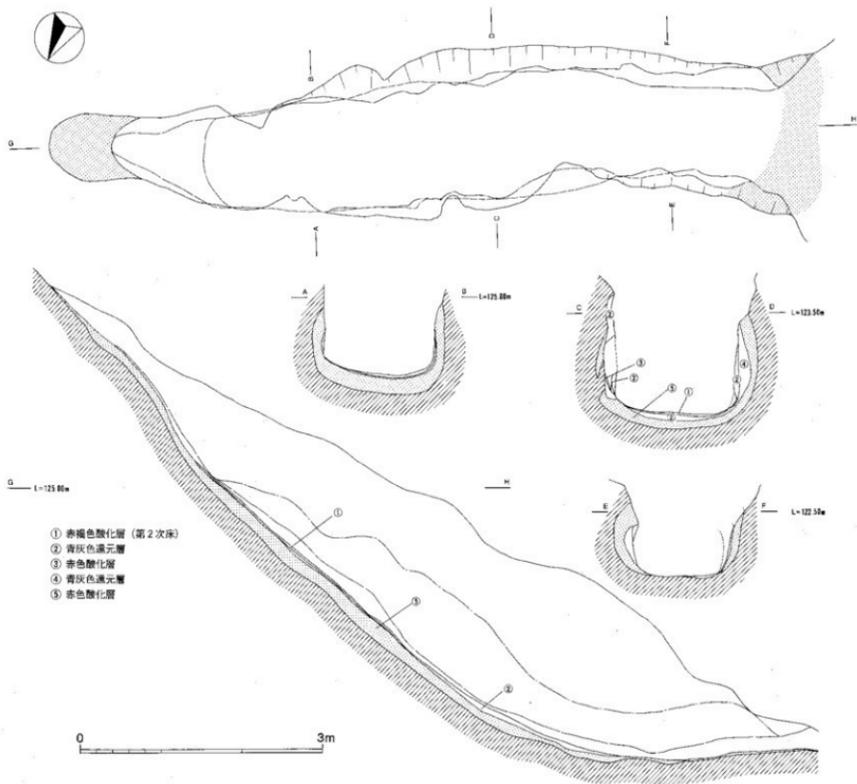
窯体内には、焼土、窯壁、暗黄褐色土の堆積が見られるが、以下述べる土器の3分の2は床面付近のものである。

窯体内出土の土器には、坏A、高坏A、高坏B、台付椀、壺B・C、平瓶、甕類などがある。

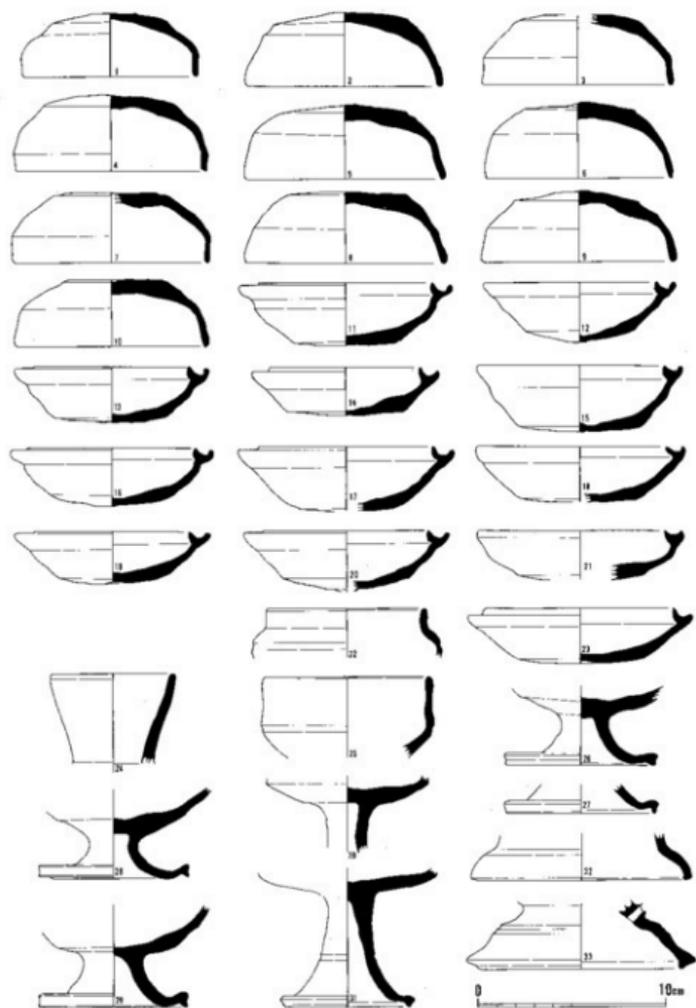
坏A (第4図1～21)

身は古墳時代以来の伝統的坏の形態を保つ型式であり、「受け部」、「立ち上がり」を持つ。口径7.5～9cm、器高2～3cmを中心とし体部は丸味を持つもの(16・19)もあるが、大部分は体部と底部の境で角度を持って屈曲する。底部はヘラ切り未調整である。立ち上がりの高さは受部と同じ位か、やや突出する程度である。

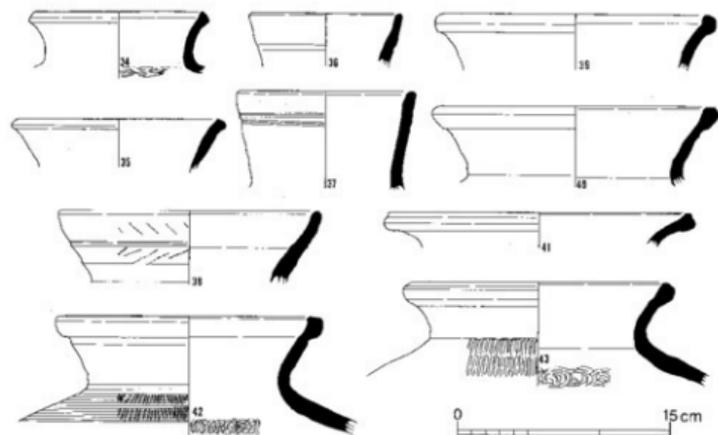
蓋は平坦気味な天井部から、口縁にかけて丸味を持って下降するタイプのものであるが、(1・4)を除いて、身と同様、天井部と体部の境に角度を持つ。口径9～10.5cm、器高3.3cm～3.9cmを測る。天井部はヘラ切り未調整である。口縁部は内彎するもの(1・4・7)と外彎するもの(2～3・5～6・9～10)があるが、後者の方が多い。口縁端部も丸く終るものと、尖り気味に終るものとの両方が見られる。しかし体部から、口縁部にかけての屈曲部に凹線を持つものは見られない。



第3圖 竈体実測図



第4图 器体遗物(1)



第5図 甗体遺物(2)

高坏A (第4図25・30~31)

高坏Aと考えられるものは3点見られる。そのうち(25)は坏部であり、他は脚部破片である。共に無蓋高坏であろう。(25)は坏部破片で口径8.8cmを測る。体部には底部から直立気味に立ち上がる口縁部を有する。屈曲部分には1条の沈線を持ち、口縁端部は丸く仕上げられている。(30、31)は長脚高坏の脚部である。円筒部はほぼまっすぐに延び、裾部にかけて緩やかに外反する。脚端部端面は下方が内彎気味に延びて終る。円筒部には2段に区切る沈線を持つが、透し及び透し状のものは見られない。

高坏B (第4図26~29)

脚部破片が4点検出されているが、坏部の形態はよく判らない。脚部は大きく外反し、一度屈曲してから更に端部を延ばす。

台付椀 (第4図32~33)

共に台付椀の脚台破片と考えられるが、形態は異なる。(32)は丸味を持って端部に延び、少し内彎して終る。(33)は大きく外方に踏ん張る大きな脚台であり、端部は三角形を呈す。円孔の透しが見られる。後者が一般的なタイプである。

壺B (第4図22)

口径8.5cmで肩の張った体部に、直立する短い口縁の付く小型の壺である。

壺C (第5図36~37)

口縁部破片であり、端部は丸く仕上げられている。共に僅かに外反する口縁部を持つ。法量に大小があるものの、口縁下には1~2条の沈線を付す。

平瓶 (第4図24)

漏斗状の口縁部破片であり、端部は丸く仕上げられている。

甕 (第5図34~35、38~43)

口縁部及び口縁から頸部にかけての破片ばかりである。(38)は大きく外反する口縁が、端部で内彎気味に終るタイプであり、口縁下に巡る1条の沈線を狭んで、二段に列点文を付す。他は短く外反する口縁端部を肥厚するタイプである。体部外面は縦方向のタタキ目あるいはタタキ目の後でカキ目を施す。内面には青海波文による調整が見られる。

灰原土器

灰原は前述のとおり広範囲に散見しているが、一応の目安としてここでは、表土・暗黄褐色・黒色灰層の順に土器の記述を行う。壺類に関しては、一括して後述する。

表土

表土層出土土器としては、坏A・坏B・高坏・椀・壺・鉢・鉢・縁などが見られる。

坏A (第6図48~65)

身は立ち上がりの矮小化が目立つものである。受け部との高さを比較すると、同じか少し高くなるものが中心であるが、(57~58)のように低くなるものもある。口径は9cm前後、器高は3~3.5cmを主体とする。底部はヘラ切り未調整で終っており、丸味を持つ1~2点を除き、平坦となるタイプが多い。

蓋は口径10cm前後、器高3~4cmと安定しており、身同様ヘラ切り未調整のままである。(51)は体部から天井部にかけて丸味を持つ、口縁端部は内傾するもの(48~49・51~52)と外傾するものが見られる。(55)は口径11cmを測り、他と法量的に異なる感があり、後述する坏Bタイプの身となるかも知れない。

坏B (第6図45~47)

歴史時代の主流となる坏の初源の形態であり、蓋は天井部中央に、乳頭状の擠みを持ち、口縁部内面に身受けの返りを持つ。4点出土しており、共に口径9cm前後となる。

高坏 (第6図70~73・78)

全て坏部の破片であり、脚部の様子は不明であるが、ほぼ垂直に立つ口縁を持つもの(73・78)と、やや外反気味に口縁部の立つものがある。

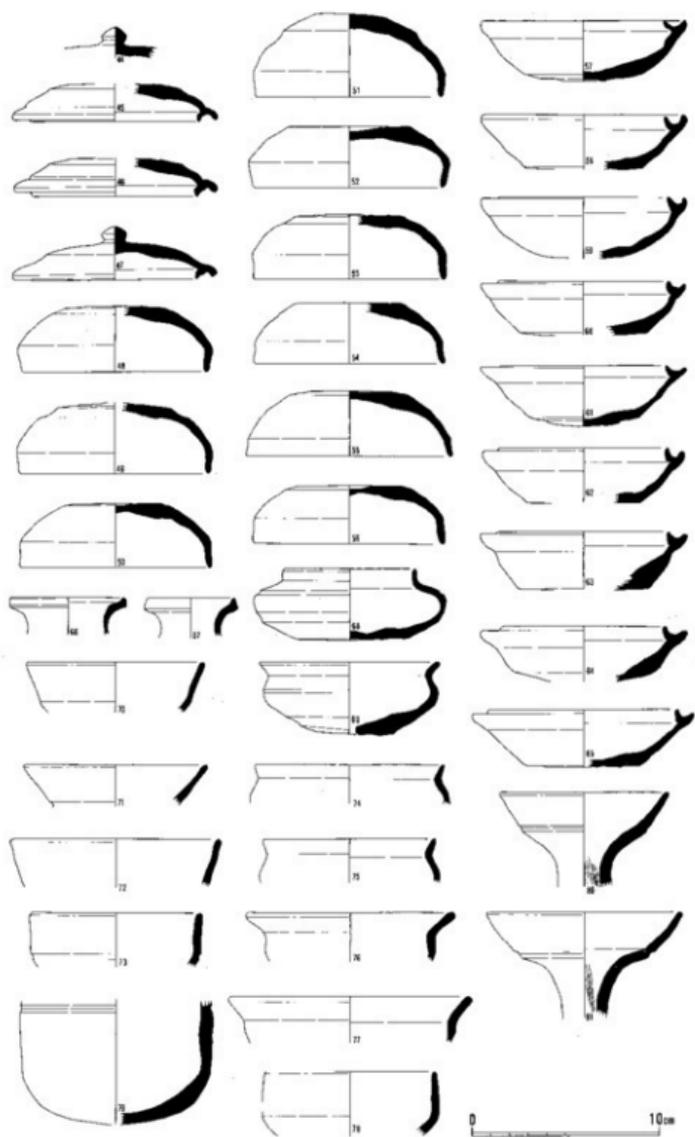
壺B (第6図68~69・74~75)

肩の張った体部から短い口縁部が、直立あるいはやや外反気味に立つ小型の壺であり、口径に比べ器高は低い。(69)は底部穿孔となっている。底部は平底である。

(66~67)は小破片の為不明確であるが、長頸壺の口縁かと考えられる。

鉢 (第6図76~77)

短く外反し、肥厚する口縁を持つ鉢である。口縁部破片のみ出土しており、全容は判ら



第6图 灰原遺物 (表土)

ないが、体部のあり方から底部は丸底と考えられる。量的に多い器種である。

鉢 (第6図80~81)

細い頸部から大きく外反して開く口縁を持つ。頸部と口縁の境に1条の沈線を持つ。口径は9~10cmである。

椀 (第6図79)

(把手付) 椀と一般に呼ばれる土器である。口縁部は不明であるが、底部は丸底に近く、体部中央に1条の沈線を施す。

暗黄褐色出土土器

坏A・坏B・高坏A・B、壺B・C、台付椀、鉢などの器種が見られる。

坏A (第7図82~93・96~100)

身は口径8~9cm、器高2.5~3cmを中心とする。体部は直線的なタイプ(97・99)と、丸味を持つタイプ(96・98・100)が見られるが、底部はほぼ平坦になっている。立ち上がりの縮小化が目立つ。底部はヘラ切り未調整のままで終る。

蓋は口径10cm前後、器高3~4cmを測り、身と同様ヘラ切り未調整である。天井部の平坦なものが目立つ反面、(82)のように体部から天井部にかけて丸くなるものもある。口径が短くなるのに反比例して、器高は高くなる。口縁端部の傾向としては、内彎・外彎共に見られる。

なお、口径11cmを測る(92~93)は、坏B身とも考えられる。

坏B (第7図94~95)

丸味を持つ天井部中央に摘みを持ち、口縁内面に「返り」を持つ蓋である。(94)は奈良時代頃に多く見られる、大きめの宝珠形摘みが付く。

高坏A (第7図110~112)

無蓋高坏の坏部と脚部が別々に出土している。口縁は内反・外反の両者が見られるが、共に体部中央で大きく屈曲する。

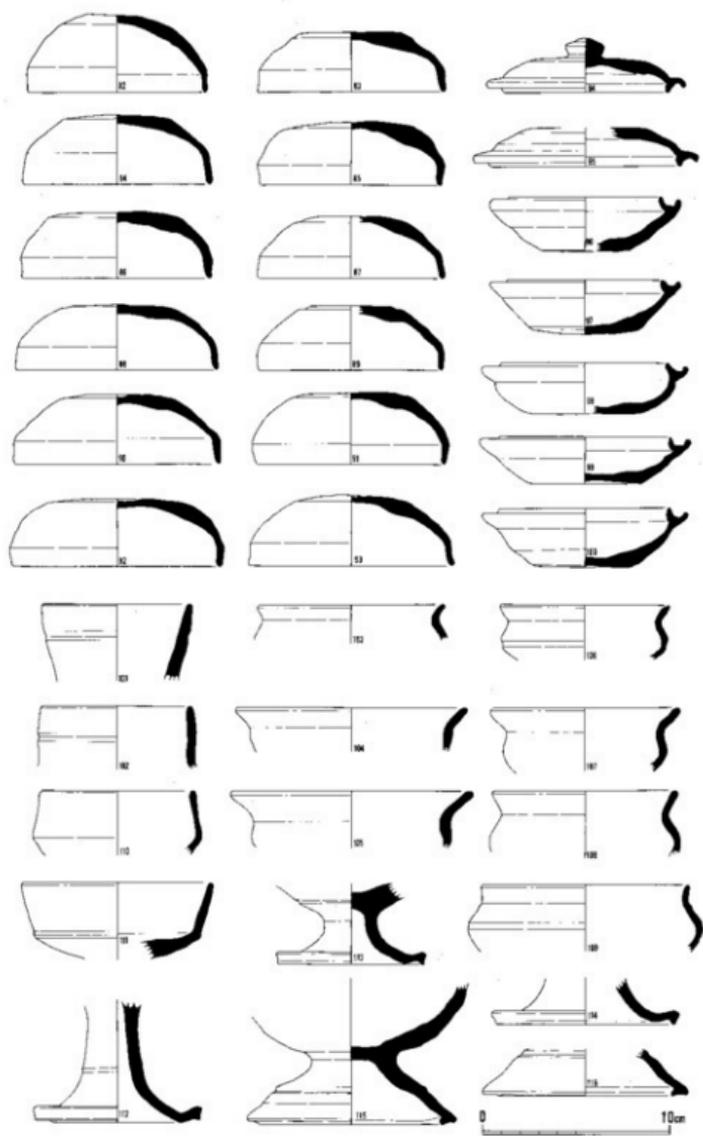
脚部は長脚で、緩やかに外反した後、一度上昇し端部を下方に延ばす。筒部中央やや下方に、脚部を二段に区切る1条の沈線を施すが、透し及び切り込み等は見られない。

高坏B (第7図113~114)

短脚の脚部破片であり、大きく外反する脚端部が下方に延びる。坏部と脚部の境には、1条の沈線を施している。

台付椀 (第7図115~116)

(115)は椀の全容を知ることのできる唯一のものであり、大きく外方に踏ん張る脚台の体部中央には、1条の凹線を施し段となる。歪みの見られる土器であり、円孔の透しは見られない。



第7图 灰原遗物(暗黄褐色)

壺B (第7図103・106・109)

肩の張った体部に真っ直ぐか少し外反気味の短い口縁の付く壺である。胴部最大幅付近に1条の沈線を施す。底部は平底と考えられる。

壺C (第7図101~102)

直立あるいはやや外反気味の口縁を持つ壺であり、口縁下に1条の沈線を施す。

鉢 (第7図104~105・107~108)

短く外反する口縁を持つ鉢である。口縁の器壁は厚く、底部は丸底と考えられる。

黒色灰層出土土器

最も量的に多く検出されており、ここで見られる器種が、当窯跡で焼成された全ての器種と考えられる。器種としては、坏A・坏B・高坏A・高坏B・台付碗・碗・壺B・壺C・鉢・平瓶・鉢・甕類などである。

坏A (第8図117~152)

身は口径8~10 cm、器高3 cm前後のものが見られる。(142)は口径8 cmと例外的に小さく、9~10 cmを主体とする。立ち上がりの縮小化が見られ、底部はヘラ切り未調整のまま終り平坦となる。

蓋は口径9.3~12.8 cm、器高3~4 cmのものが見られる。口径に幅があるが、10 cmと11 cm前後に区分できる。身と同様ヘラ切り未調整のままで終るが、身のような天井部の平坦さはない。(140)は坏A蓋以外の器種を考えるべきかも知れない。坏B蓋の存在から、身の選別が必要である。

坏B (第9図153~155)

天井部中央に乳頭状の摘みを持ち、口縁内面に「返り」を持つ蓋である。口径は9 cm前後である。

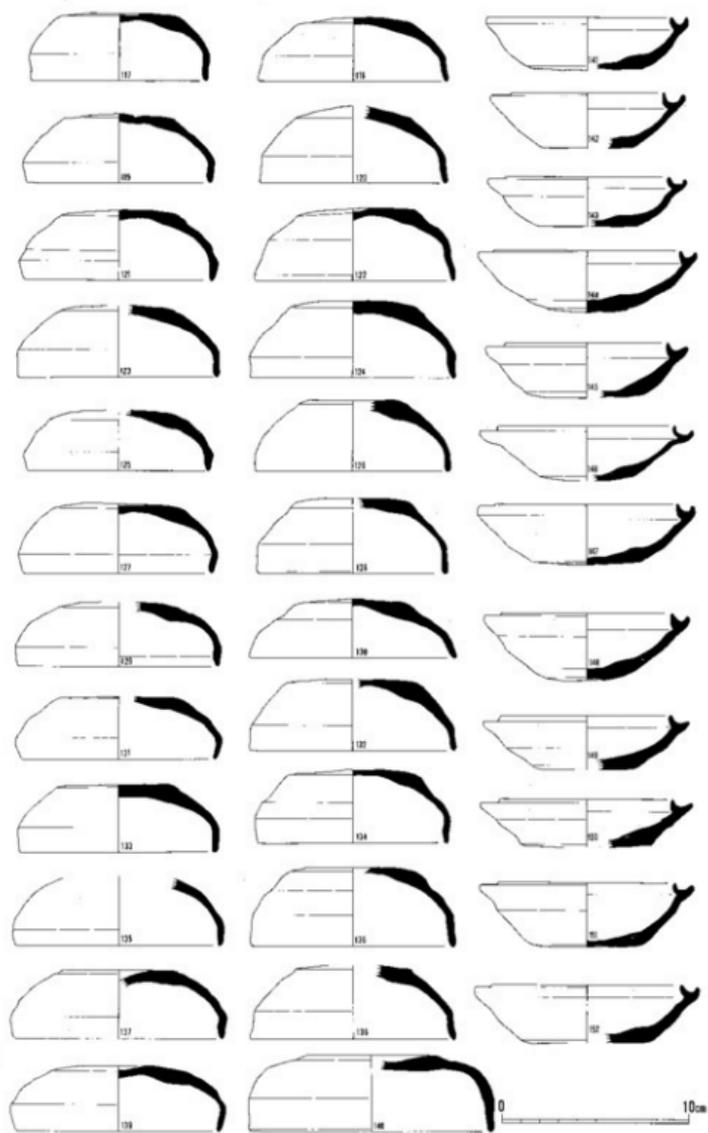
高坏A (第9図178~179・187)

(178~179)は、やや外反気味に開く口縁を持つ無蓋高坏の坏部破片である。体部中央の大きく屈曲する位置に沈線を施すが、口縁下で更に1段区分するもの(178)もある。口径は10.5~11 cmである。(187)は長脚高坏の脚部で、筒部には二段に区切る沈線は見られない。

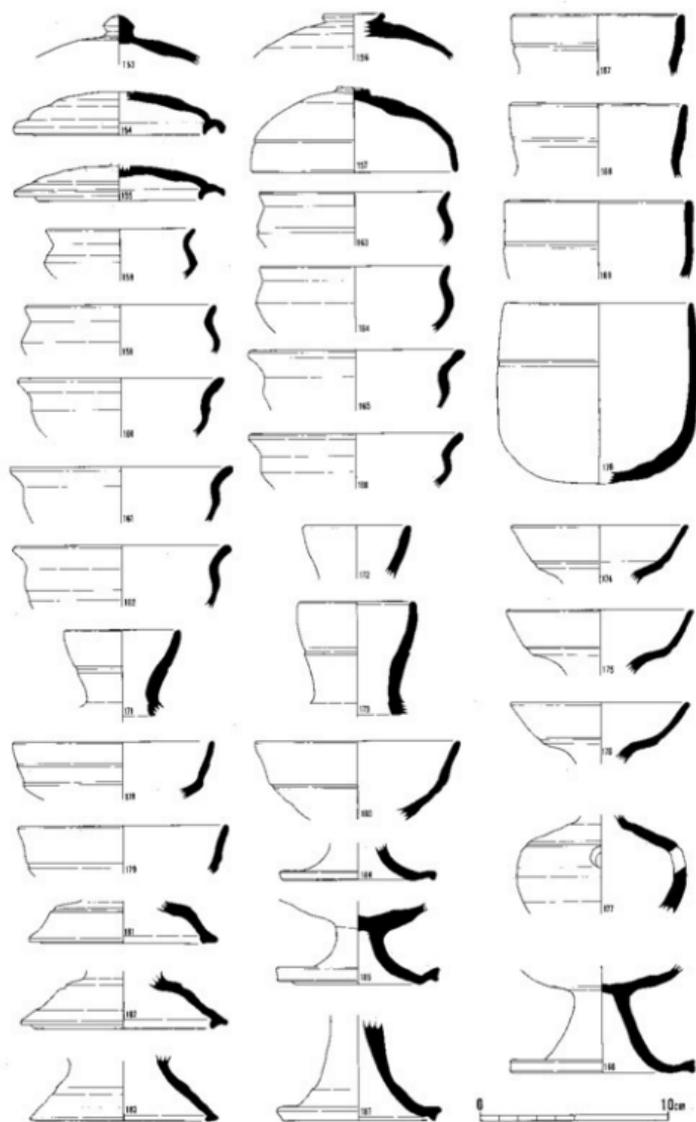
高坏B (第9図180・184~185・188)

(180)は緩やかに外反する口縁を持つ坏部破片である。体部中央に、口縁部を区分する沈線を1条施す。(184~185・188)は脚部破片で、大きく外反する脚裾が延びて、端部は三角形を呈す。(188)は特に大きなものであり、1個体しか知られていない。他は一般的に見られる。

高坏の蓋に関しては2点検出されている。(156)は中央部のくぼむ扁平な摘みを持ち、



第 8 图 灰质遗物 (黑色灰层 I)



第9图 灰原遺物（黑色灰層2）

(157) は丸味を持つ体部で、小さな扁平摘みを持つ蓋である。口縁部との境に1条の沈線を持つ。

台付椀 (第9図181~183)

脚台のみにて、2つのタイプが見られる。(183) は緩やかに外方へ傾斜し、脚端部が内側に拡がって終るもので、(181~182)は1度横方向に拡がって、段を持って下方に緩やかに延びるものである。共に段を形成する場所には沈線を持つ。

椀 (第9図169・170)

(把手付)椀と呼ばれるタイプの椀であるが、把手は検出されていない。共に丸底の底部から、直立かやや内傾気味の口縁を持つ。体部中央から口縁寄りに、1条の沈線を施す。口径は10 cm 前後である。

壺B (第9図167~168)

前述の椀と同様の形態を持つが、僅かに頸部にかけて、屈曲の様子が伺える。口径9 cm で、直立よりやや外反気味の口縁を持つ。

壺C (第9図156・159・163~164)

肩の張る体部から短めの口縁が、やや外反気味に付く壺であり、体部最大幅付近に、通常1条の沈線を施す。口径は8 cm と10 cm のものが見られる。

鉢 (第9図160~162・165~166)

短く外反する口縁を持つ鉢で、頸部から口縁にかけて器壁の厚いのが特徴的である。口径は11 cm 前後で安定している。量的に多く見られる器種である。

平瓶 (第9図171~173)

口縁部のみ出土である。口径は6 cm で長さに差異が認められることから、器形の大小が伺える。口縁部中央に1条の沈線を持つもの(171・173)と、持たないもの(172)が見られる。

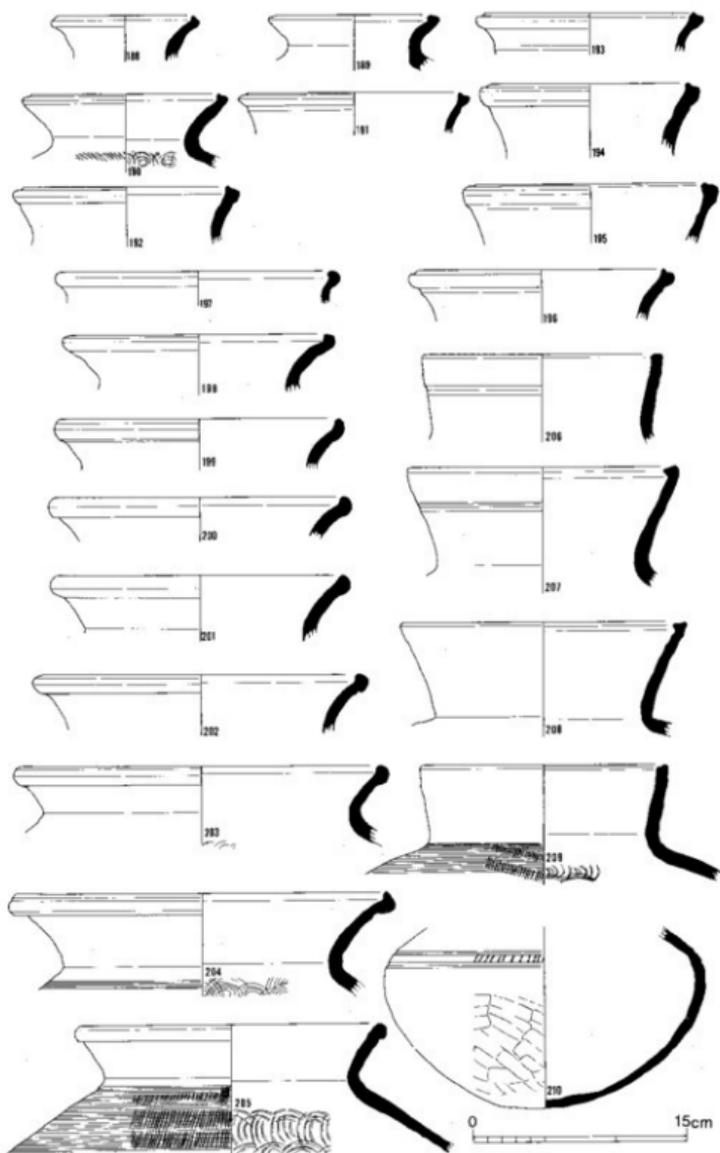
球 (第9図174~177)

(174~176)は細めの頸部から大きく外反する口縁を持つ。口縁端部は丸く仕上げられており、頸部と口縁の境付近に、1条の沈線を持つ。口径は9~10 cm である。(177)は唯一体部の判るものであり、球形の体部から細く締る頸部の様子が伺える。肩部には1条の沈線を施し、その下に円孔を穿っている。

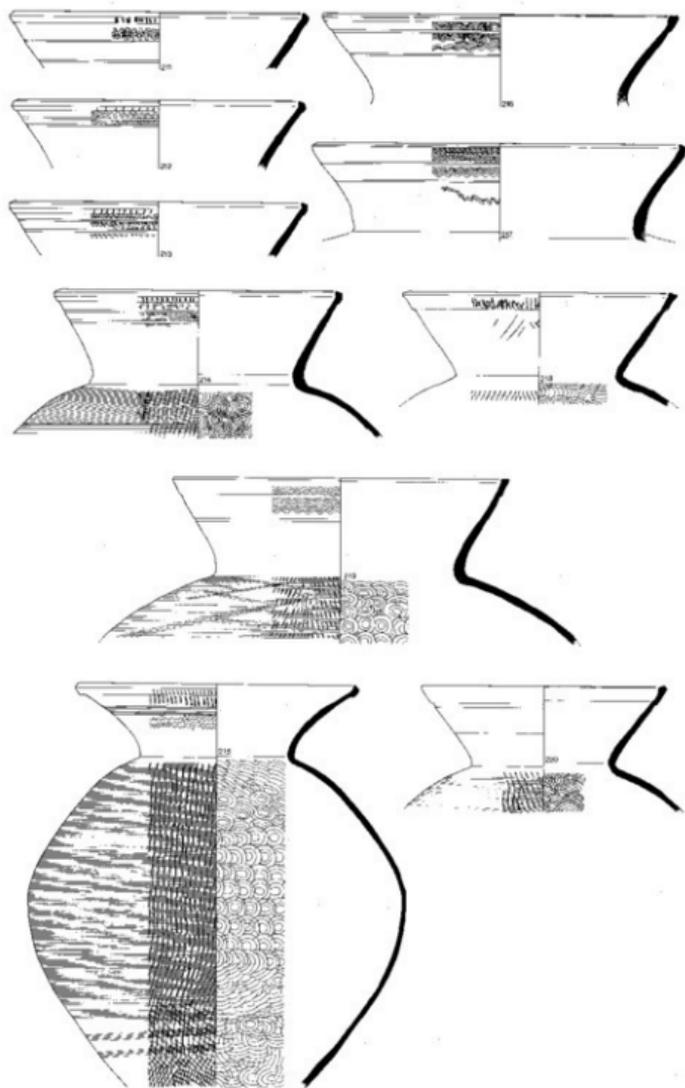
大型壺・甕類 (第10・11図)

灰原出土の大型壺・甕類を一括して記述する。

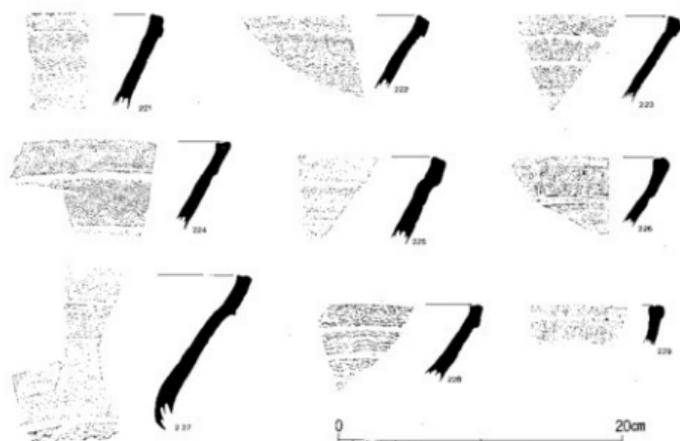
(206) は大型の壺であり、口縁部は真っ直ぐかやや外方に拡がる。口縁端部には平坦な面を持つ。(210) は球形に近い体部を持つ中型の壺である。肩部付近には、2条の沈線による文様帯を構成し、櫛描き列点文を施している。底部は回転を利用しないへら削りで丸



第10図 灰原遺物（黒色灰層3）



第11圖 灰原遺物（壺・甕）S=1:8



第12図 鑿口縁実測図

く仕上げている。

鑿は大きく外反する口縁端部を、外方に折り返し、上下に拡張するものが多く、端部は内傾気味となる。口径は10～53 cmで、大小いろいろのものが見られる。外面の調整は、タタキ目のみかタタキ目の後に、カキ目調整を施すものが主流で、内面は同心円文を中心に、青海波文が見られる。(211～215)は口縁下に、2～3条の沈線によって形成された文様帯を持つ。文様帯には、波状文と櫛描き列点文の組合せによる文様を施す。

組み合わせは、①波状文と波状文、②波状文と列点文、③列点文と櫛描き文などであり、全く文様を施さないもの(220)も見られる。

また、波状文は5～6条を1単位とし、1段のもの、2段のもの、2段に重複するもの、波状文の意図のみで、明瞭な波状文となっていないものなどが見られる。

〔参考文献〕

- 兵庫県教育委員会「多利遺跡群発掘調査報告」 1987年
兵庫県教育委員会「松ノ本古墳群」 1985年
兵庫県教育委員会「山垣遺跡」 1984年
市島町「丹波三ツ塚遺跡 I」 1973年
市島町「丹波三ツ塚遺跡 II」 1975年
市島町「丹波三ツ塚遺跡 III」 1981年
市島町「久良部1号墳」 1987年
兵庫県教育委員会「荘園・館・経塚」第2回展示会図録
兵庫県教育委員会「弥生人のムラとくらし」第3回展示会図録
春日七日市遺跡発掘調査団「春日七日市遺跡」 1984年
宇治市教育委員会「集上り瓦窯跡発掘調査概報」 1983年
養田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」史林69巻3号 1986年
白石太一郎「畿内における古墳の終末」国立歴史民俗博物館研究報告 第1集 1982年
田辺昭三「陶邑古窯跡群」I 平安学園 1966年
大阪府教育委員会「陶邑」IV 1979年
奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」I 1976年
奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」II 1978年

第4章 まとめ

当窯跡出土須恵器は、坏A身に於ける立ち上がり部の縮小化、坏B蓋の出現などから、従来より7世紀前半期の土器と称せられてきたものであるが、最近の発掘調査及び研究などから、更に詳細な時間的位置が検討されている。

当窯跡の須恵器を検討するに当って、年代決定の容易な瓦陶兼業窯の資料として、豊浦寺に瓦を供給した京都府宇治市の集上り窯の編年資料及び、^(註1) 菱田哲郎氏による「集上り窯出土須恵器の編年」^(註2) 資料を参考に時間的位置を比定したい。

年代決定の指標として、坏A身・蓋の口径の縮小・退化現象、高坏脚部に見られる特徴の変化、坏B蓋の存在および調整をもってし、一括性に欠けるが、一応、窯体土器・灰原表土・灰原暗黄褐色・灰原黒色灰層別に検討する。

集上り窯の報告書によると、土器は第1段階から第4段階に区分されており、第1段階は1・2号窯灰原の特定資料を指標に、第2段階は2号窯最終床面資料を、第3段階は3号窯最終床面資料を、第4段階は1号窯最終床面資料を指標として、坏A身口径の法量変化を、第1段階で10.5~11 cm、第2段階で8.5~9.5、第3段階で8.5~9 cmと示している。坏B蓋の存在については、第3段階から見られ、第2段階において坏B蓋の成立につながる器形の出現との指摘がある。高坏脚部の特徴変化は、第1段階で長脚2段高坏に2~4方の1ないし2段透しを持つものが見られるが、2段階以降については不明瞭である。

次に菱田編年では、集上り窯報告書編年を発展させ、集上り窯資料を1~3段階区分にしている。

すなわち、報告書編年の第3段階と第4段階の差が明瞭でなく、資料数も少ないとの理由から、両段階合わせて第3段階とし、また、報告書編年の第2段階では、第3段階と時間的な差が少ない可能性があるとの理由から、別の資料(2号窯灰原)を使って新2段階を設定している。

菱田編年によると坏A身口径の法量を、第1段階で12 cm 前後、第2段階で10 cm 前後、第3段階で10 cm を越えないとし、坏Bの出現を第2段階と提示している。高坏の特徴変化としては、第1段階は長脚2段透し、第2段階では透しの退化、消失が見られ、第3段階では2段に区切る沈線の消失とされている。

そこで、当窯跡須恵器の法量変化を見ると、窯体土器の坏A身は口径で8 cm を中心に、7.8~10 cm、蓋で口径9.6~10.5 cm、灰原表土で坏A身口径が9 cm 前後、蓋で口径10 cm 前後、灰原暗黄褐色土で坏A身口径が9 cm を中心に8~9 cm、蓋は口径10 cm 前後、灰原黒色灰層では坏A身の口径が8~10 cm、蓋で9.3~12.8 cm となっている。

坏B蓋は灰原から9点出土しているが、全体的に体部から天井部にかけて丸くつくられている。天井部にはヘラ削り調整の痕が見られる。

高坏の脚部特徴としては、2段に区切る沈線の見られるものを中心に、1点だけ沈線の見られないものが存在するが、絶対量は少ない。

以上のデータから考えると、当窯跡土器は、坏A身で口径9cm前後を測り、10cmを越すものではなく、蓋では口径10cm前後となっている。坏B蓋は少量ながらも存在しており、形態に地域性が見られるものと考えられる。また、高坏脚部の特徴は、2段に区切る沈線の見られる段階を中心としている。

これらから、準上り窯資料による編年と比較した場合、口径の縮小化の目立つ第3段階に比定されよう。高坏の特徴からは第2段階に近く思われるが、ヘラによる切り込み状の透しの退化したものは見られないなどから、第3段階に比定し、第3段階の範疇にあっても、2段に区切る沈線は残りうると考えたい。坏B蓋に関しては、坏A・坏B両者のあり方は前後関係とは考えがたく、両者共存の関係にあり、坏A口径の縮小化の著しさと坏B蓋のあり方を、第3段階に比定する当窯跡土器の実態として把握し、共存する両者の幅を坏B蓋の初現の時期差とし、畿内より遅れる地域の現象と考えたい。

南1号窯の編年の位置づけとして、今見てきたように菱田編年で7世紀第2四半紀頃と想定する。最後に鴨庄古窯跡群内で最古の窯跡は、岩戸5号窯が知られており、坏A身の口径が11cm前後の退化した立ち上がりを持つ土器が見られる。当窯跡に先行する時期の窯跡資料と考えて間違いなからう。

また、後続する資料としては、南2号窯跡^(註1)の資料があり、南1号窯跡に隣接するように灰原が発見されている。土器としては天井部中央に偏平な宝珠形の擠みを持ち、内面に退化した返りを持つ蓋が知られており、少し時間差を持つ。

しかしながら、鴨庄古窯跡群に於いて操業の最盛期は奈良時代を待たねばならず、三ツ塚遺跡との関係が強く感じられる。

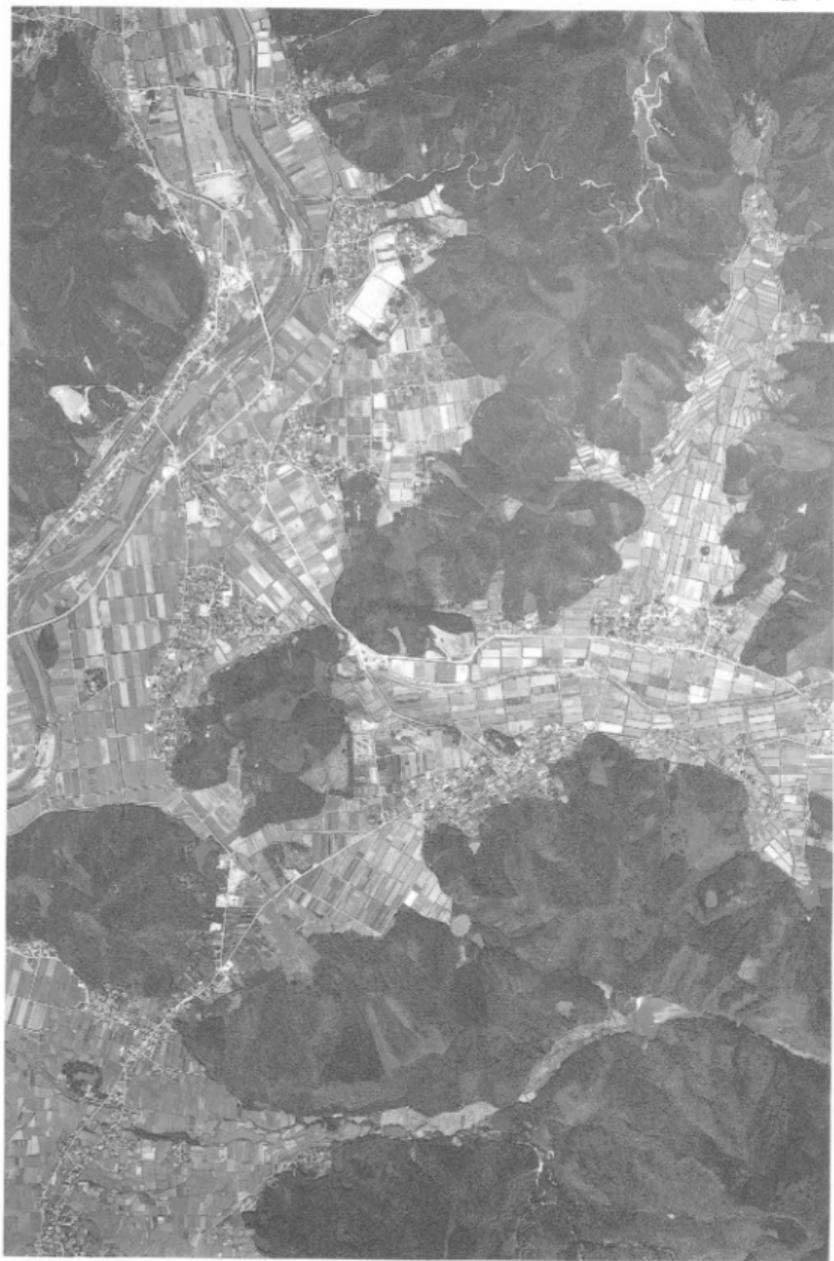
鴨庄古窯跡群については、奈良時代窯跡の調査は4基実施され、鴨庄古窯跡群(2)として報告を考へており、次回に全体的な窯跡群のあり方を検討したい。

註1. 宇治市教育委員会「準上り瓦窯跡発掘調査概報」1983年

2. 菱田哲郎「畿内の初期瓦生産と工人の動向」史林69巻3号 1986年

3. 市島町「丹波三ツ塚遺跡 Ⅲ」1981年

4. 菱田哲郎・西山茂己氏御教示



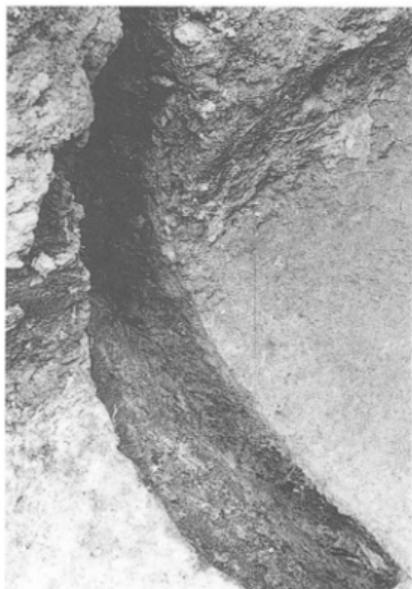
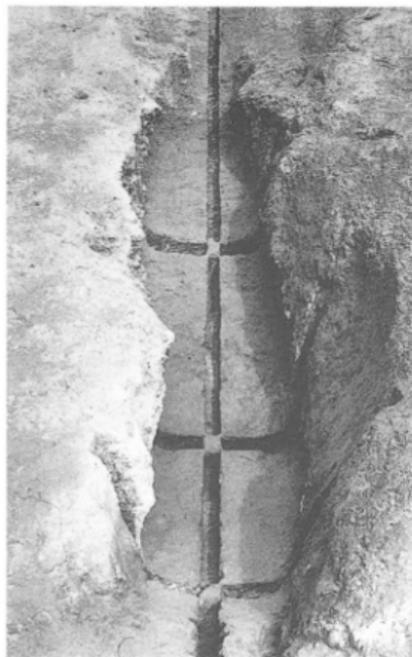
遺跡周辺航空写真



窯跡遠景 (調査前)



窯跡遠景 (調査後)



上左 竈体たち割り状況
下 竈体たち割り横断

上右 竈体たち割り横断



前庭部付近土層断面



焚口付近土層断面



灰原上段土层断面



灰原下段土层断面





82



85



86



91



92



500



94



501



115



502



119



118



121



122



129



125



134



128



157



148



170



50



47



57



69

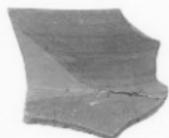
出土土器 (4)



503



504



505



506



507

甕口縁



508



509



510



511



512



513



514



515



516

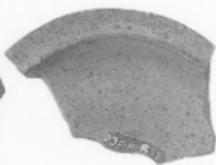
环A盖



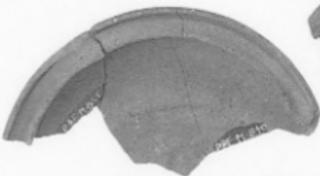
517



518



519



520



521



522

环A身



171



173



124



523



524



525

平瓶口緣



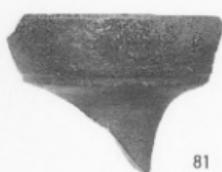
174



80



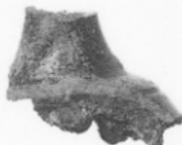
526



81



527

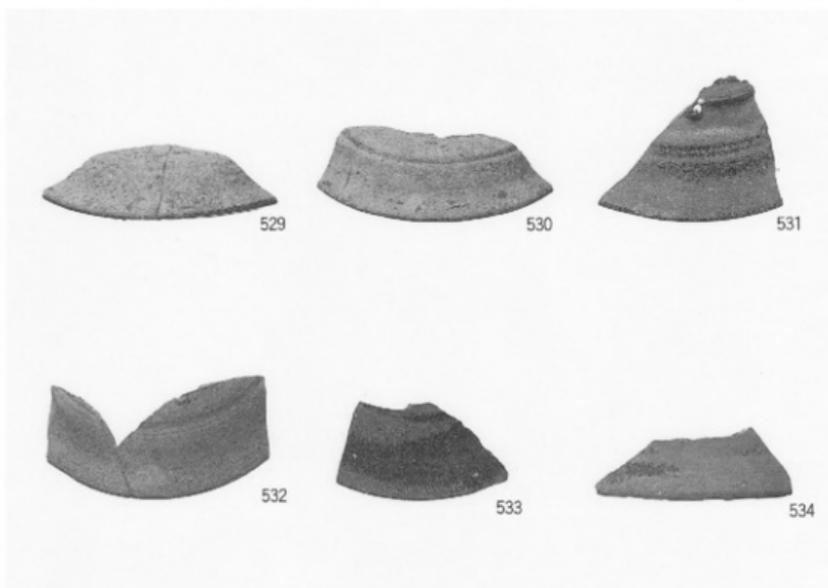


528

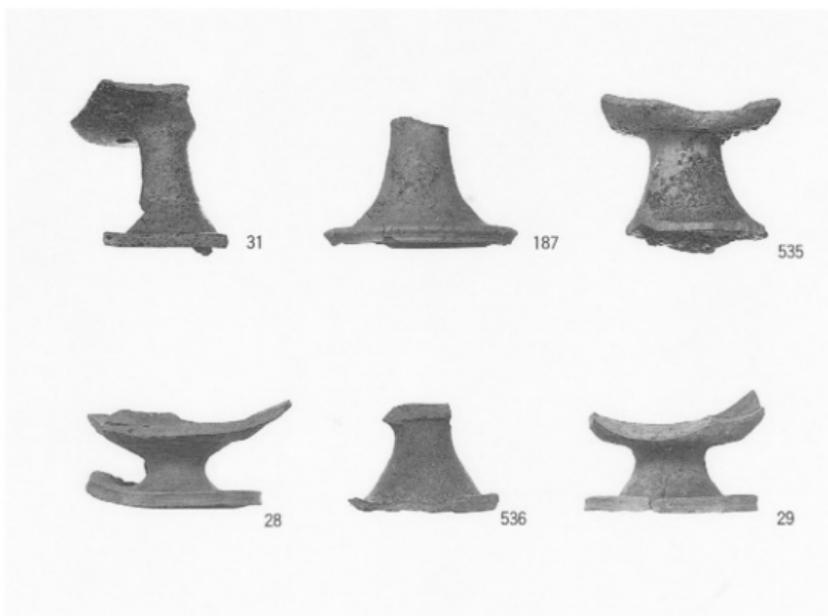


177

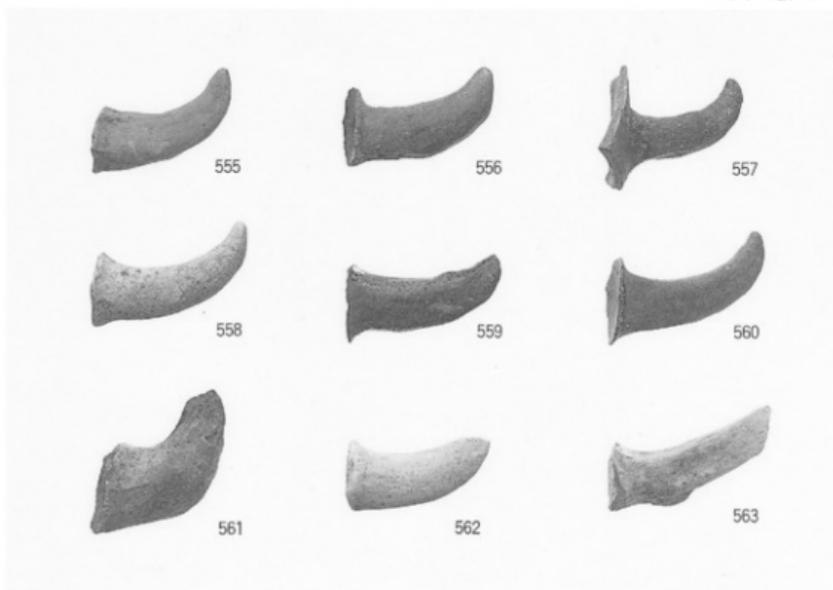
瓦甕



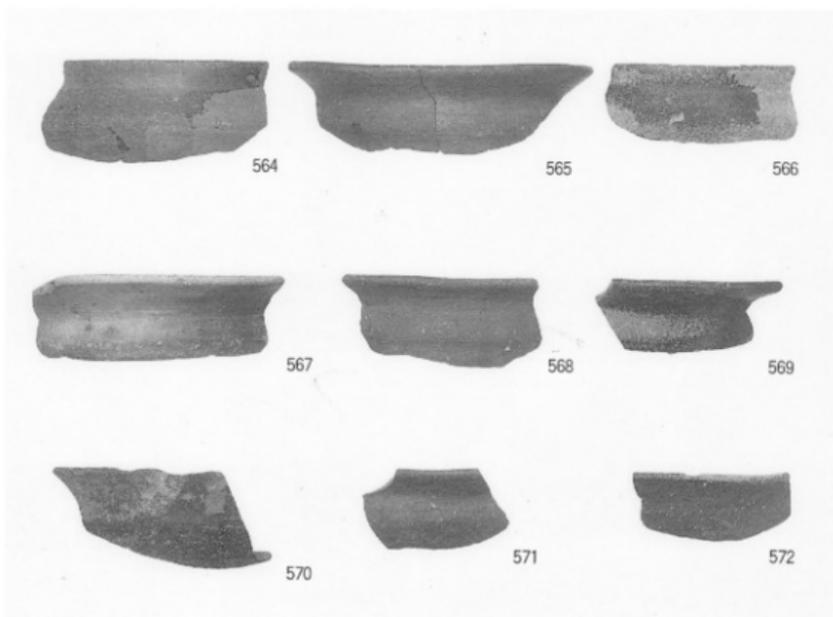
台付椀脚台



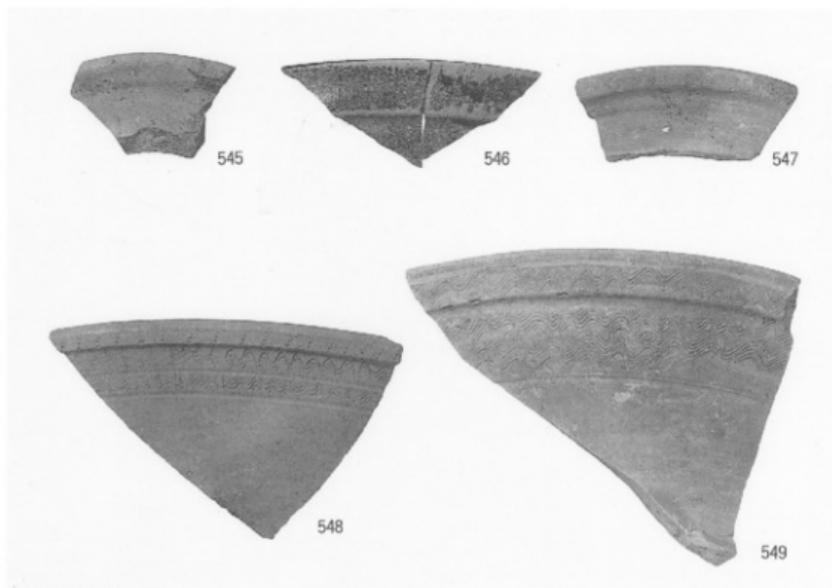
高环脚部



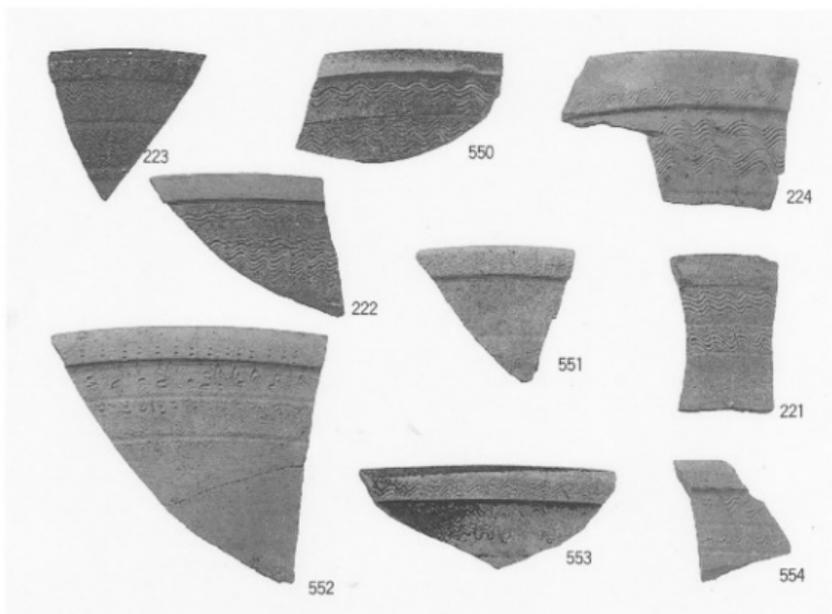
把手



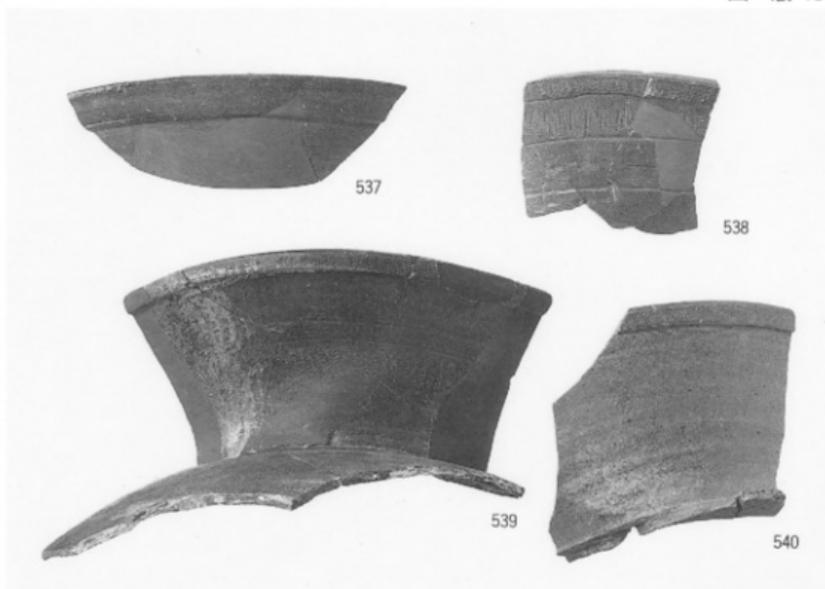
钵口缘



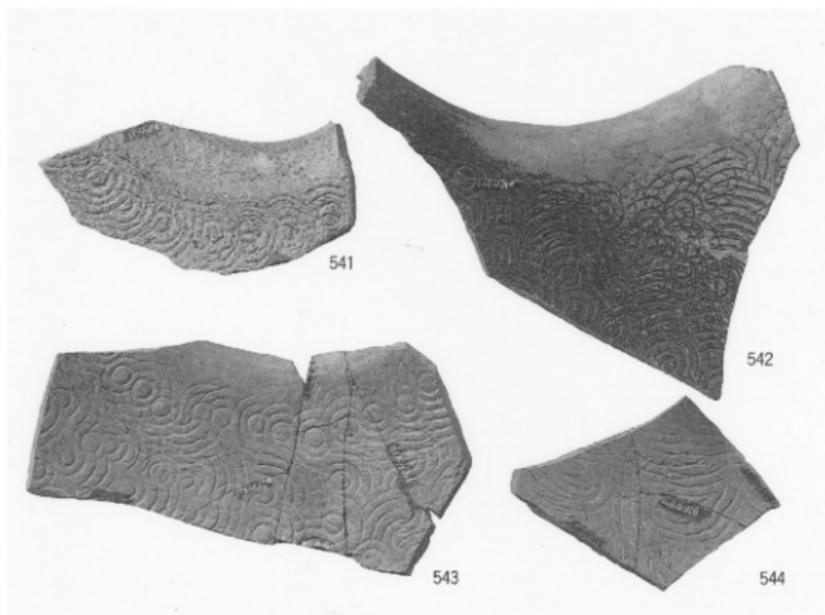
壺口縁文様 (1)



壺口縁文様 (2)



壺口縁文様 (3)



壺内面調整

兵庫県文化財調査報告書 第56冊

鴨庄古窯跡群 (1)

—南1号窯跡—

発行日 1988年3月

編集 兵庫県教育委員会

発行 福田印刷工業株式会社

印刷 〒658 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6-3

TEL (078)811-3131代

FAX (078)851-8843